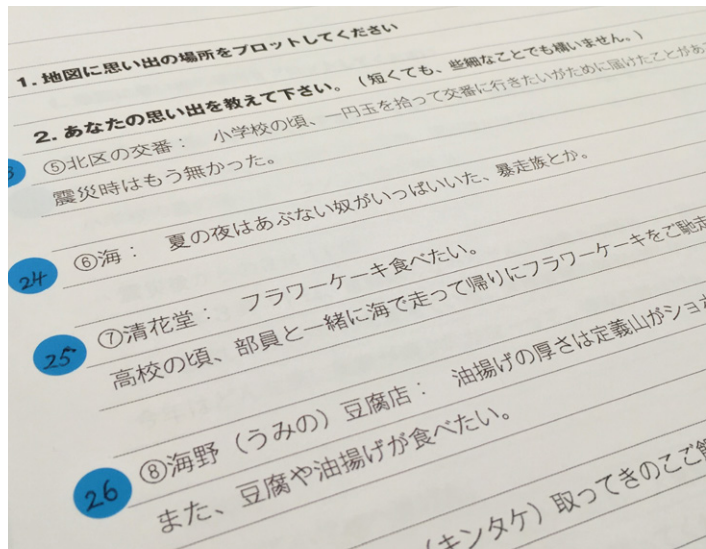


集まって暮らしていた記憶を 可視化するために

未来への記憶マップ『荒浜』製作委員会のメンバーである建築家の小山田陽さんからは、マップ製作に取り組んだ経緯とこれまで集まってきた思い出の報告がありました。

東日本大震災の後、荒浜に住んでいた知人に現地を案内してもらったことがあるという小山田さん。その時、知人が敷地境界線を頼りにしながら自宅を探していたのが印象的だったそうです。自宅があった敷地を見つけると「ここにあった古い蔵を改装して住んでいたこともあったな」「このあたりでは、夏になるとバーベキューをしてたんだ」と次々と思いが語られたそうです。そうした知人の姿をとおして、「ここに忘れられない思い出がある」という、土地に染み付いた記憶のあり方を目の当たりにしたといいます。

「今は住宅の基礎も撤去されて、どこが自宅だったのか分からなくなった住民も多いし、『荒浜にあったもの』が見えなくなってしまうている。一見すると何もなくて、外から来た僕たちは『最初からまっさらな土地だったんじゃないか』と思いがちだけど、そうじゃない。ここには、豊かな自然も生業もあったことが、住民の皆さんの語りに触れると見えてくる。そうした荒浜ならではの土地の歴史や住民の皆さんの思い出が、今回の利活用事業にもちゃんと生きていってほしいと思います。」（小山田さん）



第2回の利活用検討委員会では、「歴史や文化を踏まえた『荒浜らしさ』が明確に伝わってこない」という指摘がありました。そうした意見を踏まえて、「この場所は空き地ではない」ということを利活用事業の提案者にも見えやすくして伝える手段としても、「未来への記憶マップ」は役立つのではないかと実行委員会のメンバーは考えています。

実際に集まってきた思い出を見てみると、「昔は仕事場を貞山堀の近くに構えていて、合間に釣りをして楽しんだ」「海の近くにあった小屋に仙人みたいな漁師さんがいて、いつも作業していた」「浜辺には食べられる葉っぱがあった」「ラーメン屋さんによく行ってたけど、あそこのお母さんは元気かなあ」という、ほんのささいな日常の一コマですが、荒浜の暮らしの様子が垣間見えてくるようです。

「こうして集まって暮らしていく中で、たくさんの苦労ややり繰りもあったんだと思います。そうして暮らしを営んできた人々の記憶が『未来への記憶マップ』には重なっていて、俯瞰してみると土地に根差して暮らすことの意義や、ひいては楽しみも見えてくるような味わいがあります。これは、『都市』にいただけでは分からない、持ちえない視点なんだと思います。」（西大立目さん）



住民が思いを巡らす時間と 事業を進めるために必要なスピード

未来への記憶マップ『荒浜』製作委員会メンバーであり、HOPE FOR project の代表を務める高山智行さんは、荒浜のすぐそばの笹屋敷地区の出身で、よく荒浜にも遊びに行ったといいます。

震災直後から避難所となっていた小学校で安否確認や津波で汚れてしまった写真の整理を手伝う中で、同級生や知人が「遺族」となっていく姿も目の当たりにしてきたそうです。そうしたやりきれない思いを持った人たちが集える場を作ろうと始めたのが、3月11日に荒浜小学校で花の種を入れた風船を飛ばすイベントでした。灰色の風景の中に鮮やかな風船が飛ばされていく―それを見ながら手を合わせる人、「さよなら」を言う人、さまざまな人たちが集う様子を見て、「この場所で続けていきたい」と毎年3月11日にイベントを続けているそうです。「未来への記憶マップ」を作るにあたって、高山さんはさまざまな世代に対してヒアリングを行ってきました。

「当時高校生だった子が、今は大学生。そういった子たちに荒浜のことを問いかけると、堰を切ったように話し出すんです。そのくらい思い出がある場所なんだと改めて思いました。今はなればなれになってしまったけど、友達と荒浜で過ごした時間はかけがえのないものになっていて、それがいまだに若い子たちを繋ぎとめている要素になっていると感じました。」（高山さん）



一方で、「これから荒浜をどうしたいか」という質問に対しては、あまり答えが返ってこなかったそうです。「何故なんだろうとヒアリングを進めているときは分からなかったけど、今は何となくわかる気がします。みんな、ここで暮らしてただけで『荒浜をこうしたい』という強い思いを持っていたわけではないんですよね。ここで暮らしが続いていく、というシンプルなことで良かったんだと思う。でも、今の利活用事業では事業化することが求められていて、そこまでしないと同じテーブルについて話をすることができない。それが、荒浜に暮らしてきた方たちの思いと、現状の利活用事業の進め方が少し離れてしまっている部分なんだと思います。」（高山さん）

「荒浜の思い出」と言われると人の顔が必ず浮かんでくるという庄子さん。近所には小学校1年生から6年生まで子どもたちが揃っていて、みんなで遊んでいたそうです。宮城県沖地震の時も、そうやって遊んでいた時に起きたとのこと。

「私も含めて、住民はまだ思い出を背負っている段階ではないかと思うんです。積極的に『ここで何をしたいか』という問いかけにまだ答えられない。今できるのは、自分たちが感じてる『荒浜らしさ』を知ってもらうこと。『未来への記憶マップ』づくりもその一環です。事業者も荒浜に住んでいた私たちも、同じ目線で考えるためにこのマップを共有していくことが必要んじゃないかと思います。」（庄子さん）

